

【人文学】

研究論文

万延元年（1860）の長崎パノラマ写真と英国領事報告書

中島 恭子*¹ ブライアン・バークガフニ*²

Research on a Nagasaki Panorama and British Consulate Report in 1860

NAKASHIMA Yasuko, Brian Burke-Gaffney

Summary

In October 1860, little more than a year after the opening of Japan's doors in the wake of the Ansei Five-Power Treaties, Nagasaki British Consul George S. Morrison engaged Swiss photographer Pierre Rossier to take several photographs of Nagasaki Harbor, including the proposed site of the Nagasaki Foreign Settlement. The first taken in Japan, the panoramic photographs provide invaluable insights into the scenery of Nagasaki as it emerged from the long period of national isolation. This paper presents the photographs and the entire letter sent by Morrison to British authorities describing the scenes captured in the photographs. For the first time, it also provides a concise Japanese translation of the letter, a foothold for further research in the field.

Keywords : (Nagasaki, Foreign Settlement, British Consulate, Old Photography, Bakumatsu)

1. はじめに

1860（万延元）年にスイス人写真家ピエール・ロシエ（Pierre Rossier, 1829-?）によって撮影された 2 点の長崎パノラマ写真（図 1、図 2）は、現存する日本最古のパノラマ写真として知られているものである〔小沢 1994: 49-55〕。開港直後の長崎の港と町全体が撮影され、居留地造成のため埋立中の大浦湾の様子が写されており、大変貴重な画像および記録となっている。

また、この 2 点の風景写真は、当時の長崎英国領事ジョージ・モリソン（George Morrison, 1831-1893）が江戸のオールコック公使に宛てた、1860 年 10 月 13 日付の報告書に同封されたものであったことがわかっている〔斎藤: 11-12〕。報告書は手書きの筆記体であるが、一

部はテリー・ベネットによって活字文として発表されており〔Bennett: 47〕、さらにはセバスチャン・ドブソンにより部分的に活字化および和訳されたものが公開されている〔三井: 34-36〕。

モリソンの領事報告書は、2 組のパノラマ写真という画像資料に関して、多くの情報を付与する重要な文字資料であるが、これまでその全容は明らかにされていなかった。本稿は、この報告書全文の活字化および和訳に取り組み、資料として提示するものである。さらに、同報告書について、対となっているパノラマ写真および当時の長崎情勢と照合しながら、その内容を分析することを試みる。

*¹ 長崎大学大学院生産科学研究科 博士後期課程修了

*² 環境・建築学部 人間環境学科 教授

2016 年 10 月 19 日受付

2016 年 12 月 14 日受理

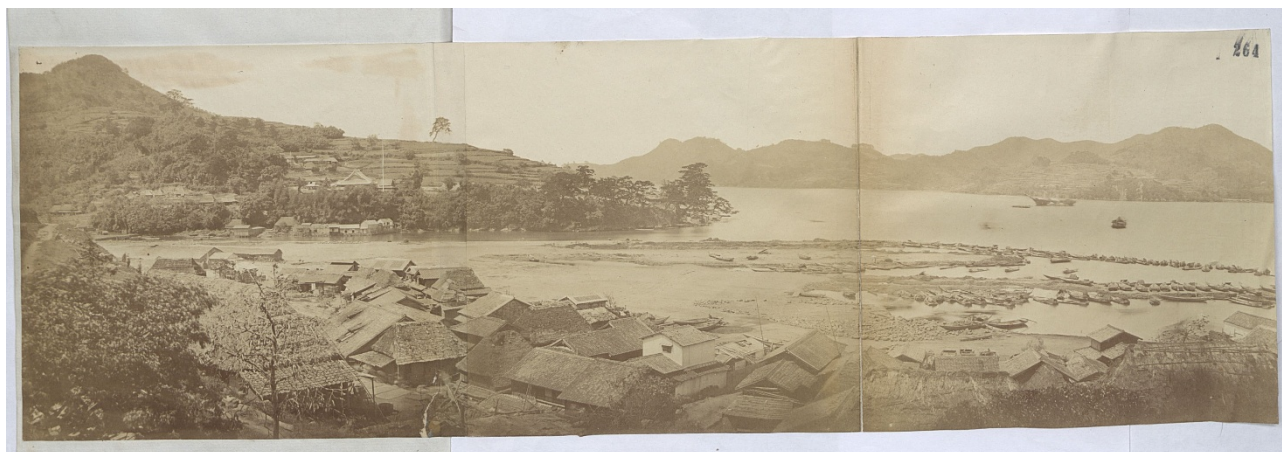


図1 3枚組パノラマ。埋立中の大浦居留地（英国国立公文書館蔵）



図2 8枚組パノラマ。長崎湾口から長崎市街、埋立中の居留地まで、長崎港全体が写されている。プレート6（出島部分）は欠落（英国国立公文書館蔵）

2. 長崎英国領事ジョージ・モリソン

ジョージ・モリソンは、開国直後の長崎外国人居留地において、英国領事として精力的に活動し重要な役割を果たした人物である（図3）。1859（安政5）年8月、長崎に到着し、妙行寺に置かれた英国領事館で職務を開始。初期長崎居留地における生活や貿易上の整備について、職業外交官として手腕を発揮し、民間領事と一線を画した。1861（文久元）年の江戸訪問時、東禅寺事件に遭遇して負傷。英国での療養を経て1863（文久3）年に長崎に戻ったものの、まもなく領事職

を辞任して再び本国に帰国。直後に外交官からも引退した〔アーンズ: 176-179〕。

3. モリソンの領事報告書とパノラマ写真

3-1 報告書の概要

報告書は、ジョージ・モリソン長崎英国領事が、江戸のラザフォード・オールコック（Rutherford Alcock, 1809-1897）公使に宛てて記した1860年10月13日付の公信である。「当港における用地問題に関する昨日付けの報告書に関連いたしまして、新候補地ならび

に長崎湾の全景を撮影した風景写真を2点（各3部）同封させていただきます」（筆者ら訳ⁱ、以下同じ）として、当該写真に関する説明から始めている。本稿では、これを活字化した英文と翻訳した和文を、報告書の冒頭部分から順に内容別に整理しながら、対となる画像と合わせて提示していく。



図3 初代長崎英国領事ジョージ・S・モリソン
(George S. Morrison) (The Illustrated London News, 26 October 1861) (個人蔵)

3-2 パノラマ写真についての説明

報告書において、モリソンはまず2点のパノラマ写真の内容、撮影地点および撮影者についての説明から始めている。

【英文1】

British Consulate
Nagasaki October 13, 1860

Rutherford Alcock Esquire
Yeddo

Sir,

Adverting to my dispatch of yesterday's date on the subject of land at this port, I have the honor to enclose

(in triplicate) two photographic views showing the new location and the whole bay of Nagasaki.

The former, in three plates, is taken from the American Consulate, on the hill which rises from the eastern base of the reclaimed place. The British Consulate temple is in front of the picture, from the fir tree above which is taken the panorama in 8 plates. This extends from the entrance of the port till it again embraces the reclaimed ground, showing it in another position, with the American Consulate in face. These two views show the whole of the bay and harbour of Nagasaki excepting of course the steep foreground of the panorama, which however is easily imagined.

Considering that it might be useful and interesting to Her Majesty's Government to possess an accurate representation of this port, I have taken advantage of an occasion not likely soon again to present itself, to obtain these views by a professional photographer here for the moment, Mr. Rossier, an employee of the firm of Negretti & Zambra of London.

【和文1】

英国領事館
長崎 1860年10月13日
ラザフォード・オールコック殿
江戸

拝啓

当港における用地問題に関する昨日付けの報告書に関連いたしまして、新候補地ならびに長崎湾の全景を撮影した風景写真を2点（各3部）同封させていただきます。

1点目は3枚組で、埋立地ⁱⁱ東側の底部から上がった丘ⁱⁱⁱにある、米国領事館から撮影されたものであります。2点目の写真では英国領事館が置かれた寺院^{iv}が写真手前にあり、そこから上がった所にある松の木^vから、8枚組のパノラマ写真が撮影されております。これは港の入口から、再び埋立地に至るまで続いており、埋立地が1点目とは別の位置に、また米国領事館が正面に見えております。これら2点の風景写真では

長崎の湾と港全体をご覧になることにはなりますが、パノラマ写真の前景が急な傾斜になっていることは、もちろん写ってはおりませんが容易にご想像がつくことと存じます。

英国政府におきまして当港に関する正確な情報の把握が有益であり関心深いことであろうことを鑑み、ロンドンのネグレッティ&ザンブラ社の依頼を受けこの地に当面滞在中の職業写真家ロシエ氏^{vi}によって撮影された、これらの風景写真を入手するというまたとない機会を得ました。

このモリソンの記述から、報告書に同封された2点のパノラマ写真の撮影地点について、8枚組の図1は東山手の米国領事館（現・東山手十二番館、旧居留地私学歴史資料館）、そして3枚組の図2は南山手の松の木（現・旧グラバー住宅）の場所であることがわかる。

図1には図2の撮影地点である松の木が写り、図2には図1の撮影地点である米国領事館が写っており、加えて両方の写真に埋立中の大浦があり、両撮影地点が大浦を挟んで向き合うような位置にあることから、2組のパノラマ写真の位置関係が把握できる。

このように、モリソン領事はまず報告書の冒頭において、これら2組のパノラマを示しながら、大浦居留地として造成中の埋立地について、長崎の湾や港、領事館との位置関係などに関する報告から始めている。これは「英国政府におきまして当港に関する正確な情報の把握が有益であり関心深いことであろうことを鑑み（中略）これらの風景写真を入手」したというモリソンの意図を、具体的に表したものと捉えることができる。

3-3 ロシアの動向

パノラマ写真2点の基本的情報に続き、写真の内容に関してモリソンが最初に言及するのは、長崎におけるロシアの動向についてである。図2の5枚目にあたるプレート5（図4）を示しながら、埋立中の居留地对岸に位置する稲佐地区のロシアの様子について報告する。

【英文2】

The quarter where the Russians occupy two or three fine temples – Goshinji and others – is on the opposite side of the bay, shown in the 5th plate from the left. They have now three gunboats here, and I believe it intended to always have at least one, which shows that although without any trading interests in Japan they consider it of importance to have a show of force ever present. It will be remembered that when I applied for the temple Goshinji for the use of our Naval Department, the Governor replied that it was impossible to overcome the objections of the priests. The Russians have there a hospital for their fleet in these waters and a school.

【和文2】

ロシアが2、3の立派な寺院—悟真寺や光明院など—を使用している地区は湾の対岸にあり、左から5枚目に見えております。ロシアはこの地に小型砲艦を3隻停泊させており、そのうち少なくとも1隻は常時停泊させるよう企ててきたと思われませんが、それはロシアが日本との交易に全く関心がないにも関わらず、武力を顕示し続けることが重要であると考えていることを示しております。我が国海軍のために悟真寺の使用を申請した際、僧侶たちの反対を押し切ることは不可能だと長崎奉行が返答したことを忘れてはなりません。ロシアは周辺の水兵のための病院や学校をここに有しております。



図4 プレート5。画面左上は稲佐地区

ロシアが稲佐地区に滞在する端緒となったのは、1858（安政 5）年のロシア海軍フリゲート艦アスコルド号乗組員の長崎上陸である。同艦は、航行中に破損したため長崎に入港し、船体修理のため同年 9 月から約 10 ヶ月にわたり、乗組員約 500 人が悟真寺をはじめとして稲佐の寺院や民家に旅宿した〔松竹：55-57〕。さらに 1860（万延元）年 5 月以降は、稲佐地区の個人宅に止宿するロシア海軍士官等が増加した。

このようなロシア艦隊の稲佐地区における止宿は外国軍隊の独占的な内地利用であり、条約外の「居留地外雑居」であった〔宮崎：72〕。上記のモリソン領事の報告には、交易を目的としない軍隊の居留地外雑居という、ロシアの条約外の行動に対する批判と、長崎奉行所の対応への不満が見受けられる。

なお、図 2 はプレート 1 からプレート 8 までの 8 枚組で、モリソンは基本的に写真の順序に沿って報告書を記しているのだが、これに反してロシアについては例外的に、プレート 1 からプレート 4 には触れず、関連するプレート 5 を示して記述を始めており、それだけロシアの動向を注視していることがわかる。

3-4 長崎製鉄所

ロシアの状況に次いでモリソンが報告するのは、稲佐と同じく居留地の対岸にある工場、すなわち飽の浦に建設中の長崎製鉄所についてであり、プレート 3、4（図 5）の合わせ目にあると説明している。

【英文 3】

The engineering factory of the Japanese is on the same side (shown in the plates 3 and 4 where they join). The place is called Akunoura. There they have been instructed during three years by Dutch officers and they have a large factory with all the machinery for repairing or even making steam engines. A Russian frigate was last year repaired there. The Japanese intend to carry on this factory without foreign aid after next year.

Our coal depot is seen in plate 3 to the left of Akunoura. There is deep water in the bight between.

【和文 3】

日本人の工場が、同じ対岸（3 枚目と 4 枚目の合わせ目）にあります。この地は飽の浦と呼ばれております。そこでは日本人がオランダ人士官たちから 3 年に渡って指導を受けており、修理のみならず蒸気機関の製造さえも可能な、あらゆる機械を備えた大きな工場を持っております。昨年はロシアのフリゲート艦が 1 隻そこで修理されました。日本人たちは来年以降、外国の助力なしでこの工場を運営するつもりであります。

わが国の石炭庫は飽の浦の左手（プレート 3）に位置し、あいだの入り江はかなりの水深となっております。



図 5 プレート 3、4。合わせ目付近に飽の浦地区

長崎製鉄所^{vii}は、オランダ海軍機関将校ヘンドリック・ハルデスの監督の下、1857（安政4）年に飽の浦において建設が始まり、1861（文久元）年に落成、日本で初めての本格的な洋式工場であった。工場は建設中からすでに稼働を開始しており〔菱谷：37-38〕、1859（安政6）年には先述のロシア軍艦アスコルド号がここで修理された〔楠本：38-39〕。モリソンの報告にも前項の通りその記述がある。幕末の開港直後の長崎に出現した工場の威容は、長崎を訪れた外国人にも強烈な印象を与えている〔菱谷：20-21,23,27-28〕。図5は、建設中の長崎製鉄所と周辺の集落が写された貴重な画像資料である。

3-5 出島

報告書は“Plate 6 shows Dejima—”という文章で段落を改め、プレート6に関する説明に移行する。出島とその背後に写る長崎市街についての地理的・気候的描写である。

【英文4】

Plate 6 shows Dejima with the town of Nagasaki behind it, and in the distance our reclaimed location. Between the far end of this and Dejima, there is at low tide a mud flat, which would form an excellent position for mercantile premises if filled in, but the expense would be immense, as mud would not be a fit material for the purpose and hill soil would have to be brought

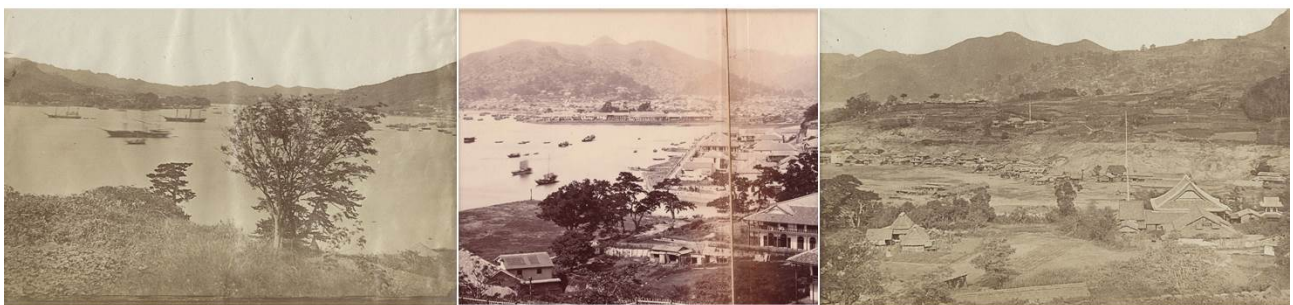
from a long distance. A canal issues through the flat, which passing through the town brings down the torrents from the hills in rear. At times the rush of water is so great as to carry away very substantial bridges. Such was the case during a gale in August last, when much damage was done.

Dejima faces the entrance of the bay and is certainly the best situation in Nagasaki, both for trade and general convenience, while in summer it always enjoys a refreshing breeze.

【和文4】

プレート6では出島を中心に、背後には長崎の街、手前には我々が利用する埋立地が見えております。この部分の遠端から出島までは干潮時に干潟となりますので、埋め立てれば理想的な商業地となることでしょう。ただし泥土は埋め立てに適さず、遠距離から山土を運ばなければならぬでしょうから、工事費用は莫大なものになると思われます。平地を流れる川^{viii}は背後の山々に端を発し、街の中心部を流れております。その勢いはときとして頑丈な橋が流されてしまうほどであります。昨年8月の強風時がまさにそうで、被害は甚大でありました。

出島は湾の入り口に面し、交易並びに利便性全般において長崎での最適地であり、夏は涼風の途絶えることがありません。



プレート5

プレート6(欠落)の類似画像

プレート7

図6 プレート5とプレート7の間に、欠落しているプレート6と類似すると考えられる画像を補ったもの（部分）
（1862 撮影者未詳）（長崎大学附属図書館蔵）

モリソンの報告によると、プレート6には、出島を中心として、その背後に広がる長崎市街、そして画面

手前には造成中の大浦居留地の姿が写されている。そこには、当時の長崎を代表するともいえる風景が撮影されているはずだが、実はこのプレート6は、英国国

立公文書館に保存されている 8 枚組のパノラマ写真において唯一欠落している部分であり、実際の画像を見ることができない。しかし、その左右の画像（プレート 5 および 7）から推察すると、プレート 6 は、図 6 の中央部分に類似する画像であったと考えられる^{ix}。プレート 6 だけが失われるに至った経緯は不明だが、8 枚組の中でも非常に重要な画像であり、今後の発見あるいは出現が大いに望まれるものである。

3-6 中国

次に領事報告書はプレート 7（図 7 の左部分）についての記述に移り、中国についての報告に多くを割く。その内容は、まず唐館の外観、地理、概要、そして、中国人の貿易における立場や態度と日本人の対応についてである。

【英文 5】

The first flagstaff on the opposite hill (plate 7) shows the American Consulate. The town runs in rear of the spur of hill on which it is situated. The factory of the Chinese Guild is situated in the valley beyond this spur, approachable except at the lowest tides by water. On the water front of their factory is a yard or open space, which is a public thoroughfare, and a guardhouse in charge of an octogenarian and a boy. The face of the factory is a long Japanese building with a high blank wall, having a large gate through it. It is only from the hill one perceives a maze of small tenements in a level excavated from the hill, having no other exit than the front gate. In former times the Chinese were subject to the same restrictions as the Dutch, but since other nations have acquired privileges the Japanese (in a spirit which must be allowed to be liberal) have admitted the Chinese to the enjoyment of the same. In fact, as my dispatches at the time showed, they bid fair at one time, taking advantage of the facilities which foreign powers had obtained to monopolize the trade and to override us with their numbers. Indeed, their demeanor in the streets was offensive and swaggering as that of only Chinese can be. The end which must have followed was foreseen

and checked by the measures which I initiated in conjunction with the American Consul and which after a year's discussion and explanation the Japanese are beginning to carry out. In truth they are very shy in their dealings with the Chinese, either from fear of them as an extensive and near neighbor or from respect for them as the source of many things Japanese – in manners, customs and literature – or perhaps from a mixture of these sentiments and even of a little sympathy, for there is certainly less fundamental difference between the Japanese and Chinese than between them and Western nations. I am very certain that the state of things threatened a year ago could not exist long without resulting in some very serious collision. Such chance is now greatly diminished.

【和文 5】

向かい側の丘（プレート 7）にすぐ目に入る旗竿は米国領事館のものであります。その丘の向こうに長崎の街が広がっております。中国商人の在外商館^xはこの丘の稜線を越えた谷に位置し、干潮時を除けば船で行き来が可能であります。彼らの商館の海に面した部分は、庭とも言うべき空き地で、公共の広場と、80 がらみの老人とひとりの少年が詰めている番所があります。商館の正面は、白壁を持つ長く伸びた日本家屋で、入り口に大きな門を擁しております。丘側から見ないとわからないのでありますが、当館の迷宮のような小さな建物群は山を切り開かれて作られ、正門以外に出口はありません。これまで中国人はオランダ人同様の制約を受けておりましたが、（英・米・仏といった）諸外国が特権を手にしたせいで、日本は（寛大としか言えない精神で）中国人にも同じ権利を実質的に与えております。事実、以前の報告書で書きましたように、中国人たちは堂々と入札し、諸外国が確保した施設を利用して交易を独占せんと、人間の数で我々を圧倒しそうな勢いがあります。まったく連中の町での態度ときたら、いかにも中国人ならではの無礼でいばったものであります。こうなることは、わたくしが米国領事と協力して打ち出した対策案において想定されておりましたから、1 年かけた話し合いと説明を経て、日

本側も対策に動き出す状況にあります。実のところを申せば、日本人は中国人との折衝に遠慮がちであります。強大な隣国として怖れているからなのか、作法、習慣、学問などにおいて、日本的なものの多くの源として彼らを尊敬しているからなのか、あるいはおそらくその両方に加え若干の同情までもが入り交じって

るからなのかもしれません。と申しますのも日本人と中国人は、西洋人と比べて根本的な差異が明らかに少ないのであります。欧米と中国の 1 年前の緊張関係が、両者の深刻な衝突を引き起こす火種であったことは間違いありません。その危険性は現在では大幅に低くなっております。



図7 プレート7、8。南山手から東山手の丘と埋立中の大浦居留地を望む。A, B, C, D はそれぞれポルトガル領事館、英国領事館、フランス領事館、米国領事館の位置を示す。

図7は、プレート7とプレート8を合わせたものである。写真が撮影された南山手から見ると、米国領事館がある東山手の丘の背後に、長崎市街が広がっている。その手前にあたる東山手を越えた真下の谷に、この写真に直接写されていないが、中国の貿易商たちが滞在する唐人屋敷（唐館）が位置している。安政の開港までの約 200 年間にわたって中国の貿易商が寄留し、約 9,400 坪という広大な面積を有していたにもかかわらず、その出入り口が大門のみという唐人屋敷について、丘から見下ろすその敷地内にひしめく小さな建物群を「迷宮のような」とモリソンが表現していることは印象的である。

1858（安政 5）年に幕府とアメリカ、イギリス、フランス、ロシア、オランダの間で安政 5 カ国条約が締結され、江戸初期以来、オランダと中国間に制限されてきた出島や唐人屋敷での貿易は終息し、安政条約に基づく新たな交易制度が始まった。その結果、中国は 1871（明治 4）年の日清修好条規締結まで無条約状態になるのだが〔植田：2-3〕、長崎では無条約下の中国人を新条約国の欧米人と実質的には同等に扱っており、

中国の商人たちも堂々と交易し「中国人ならではの無礼でいばった」態度であるとモリソンは報告している。日本人が中国人との折衝に遠慮がちであり、それが畏怖と尊敬あるいはその両方からくるものかもしれず、日本と中国には西洋と比べて差異が少ないというモリソンの考察は興味深い。

3-7 領事館

続いてモリソンは、東山手や南山手に所在する欧米諸国の領事館について説明する。

【英文 6】

The next building (plate 8) is the residence of Mr. Evans, Portuguese Consul. On the hither side of the valley are seen (plate 7) the temple, the outbuildings of which are occupied as Her Majesty's Consulate and higher up (plate 8) the residence of Mr. Mackenzie, French Consul. Both these latter are in summer on the lee side of the hill whence the view is taken and are therefore excessively hot. This will be more apparent from the first view (of three plates) taken from the American Consulate.

I have selected as the site for Her Majesty's Consulate the position to the left of the American Consulate, undoubtedly the best out of Dejima.

The place I have chosen for a burial ground is in the intermediate valley. It has hitherto been at the temple Goshinji on the opposite shore, which site I will still retain for burials from afloat.

【和文 6】

右隣に見える家屋（プレート 8）はポルトガル領事エヴァンス氏の住居であります。谷のこちら側に見えております寺の離れが、英国領事館として使われている家屋で（プレート 7）、そこから上がったところ（プレート 8）がフランス領事マッケンジー氏の住居であります。夏ともなりますとこちら側一帯は、この写真を撮った山に風が吹かず、うだるような暑さとなります。このことは米国領事館から撮影された（3 枚組の）1 点目の写真^{xi}をご覧になればさらに明らかでしょう。

英国領事館の建設予定地としてわたくしが選びましたのは、米国領事館の左手の敷地で、出島を除けば最適地であることは疑いようがありません。

新しい墓地の場所としては山と山のあいだの平地^{xii}を選びました。対岸の悟真寺にあるこれまでの墓地は、船上での死没者埋葬用に引き続き使用する所存であります。

この記述と図 7 を参照すると、ポルトガル(A)、イギリス(B)、フランス(C)およびアメリカ(D)各領事館の位置関係がわかる^{xiii}。その建物は日本の民家であることがうかがえる。また、この南山手地域の夏の暑さが「風が吹かず、うだるよう」であるのに対し、出島については涼風の途絶えることがないと前述されており、このような気候の違いについて特筆している点が印象的である。

出島は長崎湾内において気候を含めて全般的に最も恵まれた土地であるが、その地を占めているのは日本と長い関係を持ってきたオランダであり、モリソンの出島に関する言及には、そのようなオランダの優位性に対する不服が推し量られる。

ところで英国領事館は、1863（文久 3）年に妙行寺から、南山手 11 番のグリーンズ・ハウス内に移され、さらに 1865（慶応元）年に東山手 9 番の新館に移転する。しかし当報告書によると、その建設予定地として「米国領事館の左手の敷地」すなわち東山手 13 番が選定されていることが注目される。実際、この区画は「英国領事館用地」として 1872（明治 5）年末まで英国政府が借地権を有していたが、実際に建物が建てられることはなかった。

3-8 長崎の日本人の知識欲・勉学に対する熱意

報告書の総括ともいえる最終部分には、長崎に関する報告としての最後には、この地の日本人の知識欲が記されている。海外の最新の知識を熱心に吸収しようとする姿であり、ポンペの医学伝習、デ・フォーゲルの英語伝習、ロシエの写真術教授、英語やロシア語といった語学の習熟などについて記されている。

【英文 7】

It may not be too out of place in the general description of Nagasaki to mention that the Japanese take every opportunity of acquiring foreign knowledge. A Dutch physician Dr. Pompe van Meerdervoort has a school of about forty pupils, and the Dutch gentleman Mr. de Vogel has a class learning English, and I have seen very fair photographs taken unassisted by a pupil of Mr. Rossier. Many Japanese are making good progress in Russian, which they seem to consider easier to learn than English. There are however several very tolerably proficient in our language.

【和文 7】

長崎を概観しますと、ここの日本人はあらゆる機会を逃さず外国の知識を得ようとしている、と申し上げてもあながち的外れではないかもしれません。オランダ人医師ポンペ・ファン・メーデルフォールトには 40 人ほどの教え子がおりますし、やはりオランダ人のデ・フォーゲルは英語を教えています。またロシエ氏に教えを受けた日本人が独力で撮影した、かなりの出来栄の写真を目にしたこともあります。ロシア語に熟達しつつあるものも多く、英語よりもロシア語のほ

うが習得が容易であると日本人は考えているようです。しかしながら、まあまあ英語が達者な日本人も何人かはおります。

1857（安政 4）年に第 2 次海軍伝習の一環として、長崎奉行所に市役所内に医学伝習所が設けられ、ポンペ・ファン・メーデルフォールトがその教官を務めた。「40 人ほどの教え子」はこの医学伝習所の門弟である。

1858（安政 5）年、長崎・立山の目付役所内に「英語伝習所」が設立される。デ・フォーゲルはこの初代教官を務めていた [茂住: 201]。

ポンペは医学に加えて化学も教授しており、その一環として写真術の研究に取り組む門下生たちがいた。このうちロシエに教えを受けたのは、福岡藩の前田玄造、古川俊平、長崎の上野彦馬らとされている [小沢 1997: 67-71]。モリソンが記述している写真に関しては、原文では“photographs by a pupil”すなわち「生徒 1 名の手による複数の写真」と記されており、この撮影者が誰を指し、どのような写真であったかは写真史においても関心深い問題であり、今後の究明が注視される。

3-9 撮影費用・焼き増し

報告書の最後にあるのは、撮影費用の支払いなど事務的な内容である。

【英文 8】

It only remains for me to conclude this letter by requesting authority to charge in my accounts the cost of having these photographs executed, namely seventy dollars. I confess the amount was more than I had expected it would be, but considering that Mr. Rossier's time is specially devoted to other purposes, and that he was occupied with them for several days, it does not on consideration appear unreasonably high. Under any circumstances, as he is not a tradesman here for the sale of photographs I was not in a position to bargain with him on the subject, nor could I have felt it becoming so to do.

I would also request permission to charge a further

sum of fifteen dollars for an additional copy of these views presented to the Land Officer, an old gentleman to whom our “Land Question” has occasioned much trouble.

I have the honor to be,

Sir,

Your most obedient and humble servant

George Morrison

I attach also to this letter a chart of the location to assist recognition of relative positions.

【和文 8】

最後になりましたが、今回の撮影にかかりました費用の支払いをお願い申し上げます。具体的には 70 ドルとなります。予想よりも高額であったことは確かですが、本来ロシエ氏は別の用件で多忙であったこと、そして数日はそちらの仕事にかかりきりであったことを考え合わせますと、法外な値段とは思われません。いずれにしましても氏が写真販売を目的とした商人として当地にいるのではない以上、こちらも値引き交渉をする立場にはなく、またわたくしとしてもそういう心持ちにはなりません。

今回の写真を、わたくしどもの居留地用地問題の件で大変迷惑をかけた奉行所の担当役人である老紳士に進呈するため、その焼き増し料金 15 ドルを別途追加請求させて頂くことも、お許し願いたいと存じます。

貴殿の忠実なるしもべ

ジョージ・モリソン 拝

なお、それぞれの場所が比較対照してご理解いただけますよう、地図を 1 枚同封致します。

この箇所で注目されるのは、パノラマ写真の部数である。報告書の冒頭で、モリソンは江戸の公使館に 3 部を送付すると記しているが、ここではもう 1 部を「奉

行所の担当役人である老紳士」に進呈したいとしている。すなわちパノラマ写真は合計 4 部が存在したはずであるが、現存しているのは英国国立公文書館の 1 部のみであり、それも出島部分のプレート 6 が欠落している。写真の所在について今後の追跡と発見、あるいは出現が期待される。

また、進呈先の担当役人が誰であったかについても関心が持たれるところである。モリソンは「居留地用地問題で大変迷惑をかけた」人物と記している。居留地の埋立に関係した奉行所の役人として、福井金平や浜武治兵衛の名前があり〔菱谷:143〕そのいずれかである可能性が考えられる。

そして、モリソンが「それぞれの場所が比較対照して」理解できるようにとして同封した地図が図 8 である。実際、報告書の記述内容やパノラマ写真内の被写体と参照しながら確認することができ有益である。

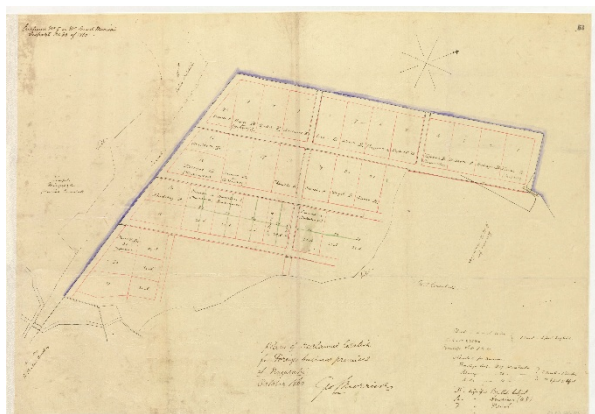


図 8 報告書に同封された地図（英国国立公文書館蔵）

4. おわりに

本稿は、1860 年に撮影されたパノラマ写真が同封された、同年 10 月 13 日付の長崎英国領事ジョージ・モリソンの報告書について、第 1 にその全文を活字化し、第 2 にその和訳を行い、これら 2 点を新資料として提示した。そして第 3 に、報告書の内容について、対となっているパノラマ写真と照合しながら分析を加えた。

これによって、日本初期写真史において貴重な資料である、ピエール・ロシエ撮影による日本最古のパノラマ写真という画像情報について、対となっている領事報告書を活字化および和訳することによって文字情

報として確定し、パノラマ写真の内容や撮影された意図を読み解くための新資料として示すことができた。

また、モリソンの報告書は、写真史のみならず、日本史、幕末史、あるいは長崎地域史においても、大変重要な情報である。報告書からは、ロシア艦隊の滞在、長崎製鉄所、中国について、日本人の学ぶ様子など、パノラマが撮影された当時の長崎における社会経済・生活文化的動向を読み取ることができる。さらに 2 点のパノラマ写真によって、これらの情報を視覚的に捉えることも可能となる。

1860 年という激動期の長崎において、長崎駐在の英国領事が、江戸の公使に対し、異例ともいえる高価な「パノラマ写真」を 2 点も添えた公式文書において、領事が何に注視し、何を報告しているかということは、すなわち当時のイギリスの長崎に対する「視線」「まなざし」に通じるものであるといえよう。加えてそこには、前述のように、同時期の長崎という地域の社会経済、生活文化という要素も表出していることが看取できる。モリソンの前任地は中国であった。その経験にもとづいた鋭い観察眼で、開国直後の長崎をどのように見ていたのか。そのような視座からこの報告書を検討することは、当時の長崎を、英国あるいは世界の動きの中に接続することにもなるだろう。その意味においても、本稿において筆者らが全文を活字化および和訳し、報告書の全容を明らかにした取り組みは大きな意義を有していると考えられる。

ロンドンの英国国立公文書館には、1859（安政 6）年の最初の覚書から第二次世界大戦中までの長きにわたって記録された、何千もの文書からなる「長崎英国領事館アーカイブ」が保存されている。本稿で取り扱ったモリソンの領事報告書、ロシエの 2 点のパノラマ写真、その際同封された地図も、同アーカイブに含まれる。同一機関が長期にわたって記録した重要資料であるが、これについての研究は残念ながらこれまでほとんど手つかずの状態であった。

一方、長崎には幕末・明治期にその風景や人々が撮影された大量の古写真が存在する。国内・海外双方の写真史研究者によって調査研究が進展しているものの、いまだ不明な点が多く残されている。こうした画像資

料の解明においても、同時代に記録された文字資料である同アーカイブの研究は、大いに資するはずである。

「長崎英国領事館アーカイブ」研究の今後の進展は、長崎の社会経済、生活文化など地域史のみならず、特に幕末から明治初期における世界史や日本史の大きな動きの中での長崎研究、さらに日本の初期写真史研究においても、大きく寄与することが期待される。

注

- i 訳出には長崎在住の翻訳家である上西園誠氏の協力を得た。
- ii 大浦居留地を指す。
- iii 東山手の丘。米国領事は当時ウォルシュ商会のジョン・ウォルシュ (John Walsh) が務めたため、米国領事館は、ウォルシュの事務所兼住居が所在した東山手 12 番におかれた。
- iv 南山手の妙行寺。
- v 一本松を指す (ヨンゴ松とも呼ばれた)。1863 (文久 3) 年、この地にグラバー住宅が竣工する。
- vi ロシエは 1859 (安政 6) 年に初来日。イギリスの光学機器メーカーで写真も販売していたネグレッティ・アンド・ザンブラ社から派遣され、1860 (万延元) 年にはステレオ写真集『日本の風景』 (*Views of Japan*) 第 2 集発行のための撮影活動を長崎で行っていた [姫野: 23]。
- vii 着工当初は「長崎鎔鉄所」と称した [菱谷: 37-38]。
- viii 中島川のこと。
- ix この画像は、約 2 年後の 1862 年にはほぼ同じ地点から撮影されたパノラマ写真の一部である。
- x 唐人屋敷を指す。
- xi 図 1 を指す。
- xiii 大浦国際墓地 (現在の川上町)。
- xiii 当時は各国領事の住居が領事館を兼ねていた。

参考文献

- (1) レイン・アーンズ『長崎居留地の西洋人』長崎文献社, 2002
- (2) 植田捷雄「日本における中国人の法的地位—幕

末より今次大戦に至る」『アジア研究』Vol. 1 (1954) No. 3: pp.1-19, 1954

- (3) 小沢健志編『幕末—写真の時代』筑摩書房, 1994
- (4) ——編『幕末・明治の写真』筑摩書房, 1997
- (5) 楠本寿一『長崎製鉄所』中央公論社, 1992
- (6) 斎藤多喜夫『横浜明治写真館物語』吉川弘文館, 2004
- (7) 菱谷武平『長崎外国人居留地の研究』九州大学出版会, 1988
- (8) 姫野順一「長崎を訪問した外国人写真師」小沢健志監修・三井圭司編『外国人カメラマンの見た幕末日本Ⅱ』山川出版社, pp.22-49, 2014
- (9) 松竹秀雄『長崎稲佐ロシア村』長崎文献社, 2009
- (10) 三井圭司「幕末期のパノラマ写真—19 世紀の制作方法と東京都写真美術館所蔵〈長崎パノラマ〉 (収蔵番号 20100448 および 20100449) を中心に」『東京都写真美術館紀要』vol.9: pp.20-37, 2008
- (11) 宮崎千穂「不平等条約下における内地雑居問題の一考察: ロシア艦隊と稲佐における『居留地外雑居』問題」『国際開発研究フォーラム』(27), 名古屋大学: pp. 71-91, 2004
- (12) 茂住實男「英語伝習所設立とその後」『英学史研究』第 12 号: pp.193-206, 1980
- (13) Bennett, Terry, *Photography in Japan 1853-1912*, Tuttle Publishing, 2006